

平成 30 年 2 月 1 日

鹿大「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業（長期派遣留学）留学終了報告書

鹿児島大学長 殿

鹿大「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業（長期派遣留学）実施要項に基づき、下記のとおり報告します。

記

1. 報告者情報

所属/学年	法文学部人文学科 2 年	性別	女
卒業/修了 予定年月日	2020(平成 32)年 3 月 31 日		

2. 留学の概要

留学期間	開始年月日	2017 年 4 月 8 日	終了年月日	2018 年 1 月 14 日
留学のタイトル	教員になるための自信と覚悟を身に付ける。			
留学の目的と概要（実践活動部分には、下線を引いて下さい）（700 字程度）				
<p>私が今回行く留学は全て実践活動である。</p> <p>私は小学校の時から将来は教員になりたいと考えおり、大学に入り留学方法について悩んでいたところ、日本語教師のアシスタントとしての留学を知った。一年生の時にも応募し不合格だったが、諦めず今年再挑戦し合格することができた。</p> <p>私がこの留学にこだわる理由は、教員を目指す上で実践的な活動ができる最高の場だと考えるからである。教職の授業で教員になるための基礎的事項を学んでいるが、教育学部に所属していないため実際に生徒たちの前で授業を行う機会がなく、本当に自分が教員に向いているのか？と不安になることがあった。今回毎日が教育実習のようであるので、生徒と日々を過ごす中で教員になるための覚悟と自信をつけたい。教員という仕事は生徒の成長を支え将来進む道を決める手助けをする重要な役割を担うものである。</p> <p>一年間の留学で、授業作りの方法・上手なコミュニケーションの回り方・クラスの生徒と向き合う姿勢など学べるものは全て吸収して、教員になるための力量をつけたい。自分はこのまで頑張れる・努力できる人間なのだという自信をつけたい。そして少しずつ吸収できたものは実践して、少しでもオーストラリアの生徒と関係を深めたいと思う。約 1 年間しか共に過ごすことはできないが短い期間の中でも積極的に交流し、「将来日本に行ってみたい」と思ってもらえるように頑張りたい。オーストラリアで日本語を上手く教えることが出来るようになれば、日本でも自信を持って英語を教えることができると考える。授業は生徒が楽しく行えるようにすべきだと考えているので、私が教員として働くときには今回の経験を生かした新しい授業法をどんどん提案し取り入れていきたい。</p>				

3. 受入れ機関情報及びスケジュール

(1) 受入れ機関情報

	1ヶ所目の機関	2ヶ所目の機関	3ヶ所目の機関
--	---------	---------	---------

国・地域	オーストラリア		
都市名	キャンベラ		
機関名 (英語)	Kaleen Primary School		
機関名 (日本語)	ケーリーン小学校		
受入れ 機関 URL	www.kaleenps.act.edu.au/		

(2) 留学期間中のスケジュール 留学月数 (10) ヶ月 / 授業料申請 (有・○無)

年 月	留学先機関	国・地域	主な活動
2017年4月8日～ 2018年1月14日	ケーリーン小学校	オーストラリア	オーストラリアのケーリーン小学校で日本語教師のアシスタントをする。

(3) 参加したプログラム (有・○無) (複数選択可)

本学の協定校交換留学	名称記入	本学の協定校交換留学以外のプログラム	名称記入
本学以外の機関による留学プログラム	名称記入		

4. 留学の成果及びその測定方法 (300字程度)

成果発表 (論文、作品等)	○	単位取得		外国語能力	○	その他	
<p>成果発表：帰国後、人文学科所属の Steve Cother 教授の指導を仰ぎ日本語教師のアシスタントとして一緒に留学する五人の学生と、大学内もしくは公民館を借りて一カ月以内に二回鹿児島県内で小学校の教師として働いている方及び教師を目指す大学生に、留学中に得た知識・体験を伝え共有する。内容はオーストラリアの小中学校での日本語指導法である。留学に行く五人は別々の学校に配属されるため、学校ごとに異なる特色のある授業法を伝えられると考える。また、小中一貫校に行く学生もいるため、授業法のみならず小中学校間での協力・連携法など技術面以外の体験も伝えることができる。現在日本では小学校からの早期英語教育が始ま</p>							

っているが、小学校教員の英語技術力・指導力不足が問題視され、かつ教えることに不安を抱いている人も数多くいる。

私が留学予定であるオーストラリアのキャンベラでは日本語教育が盛んに行われており、私の経験を伝えることで微力ではあるが英語教育の発展に貢献できると考える。

外国語能力：帰国後、TOEIC（国際コミュニケーション英語能力テスト）を受験し、リスニングとリーディングの英語力到達度を確かめる。

TOEICは初受験であるが、満点 990 点内の英語教員に必要とされている 750 点を目指す。

※当てはまる項目に○を付し、具体的に説明して下さい（複数回答可）

5. 上記 4. も含め、留学の目的がどのように達成できたか、留学で得たことは何か記述してください。

(500 字程度)

私が留学を通して得たことは数多くあった。その中でもやはり教師という仕事の難しさ・大変さは経験してみて、より実感できた。留学前の私は、自分の教師だった人を思い返しその人の授業のやり方のあまり好きではなかった部分を見つけ、「私だったら違うやり方でもっと授業を楽しませられる。」と思っていた。だが、実際に自分で授業を行ってみたら全く状況は変わった。大勢の生徒の空気に吞まれ自分が思ったように授業が進まない、45 分間で構成された授業を考えたはずなのに、30 分足らずで終了しその後に行うことが思いつかない。時間の範囲内で授業を行うことがこれほど難しいことだとは気づけなかった。

授業準備に関しても、より良い教材を見つけ生徒全員分の紙をコピーしホッチキスで止める。当たり前のことだが、このような作業にも時間はかかる。一授業にかかる先生の熱意は凄いものだと感じた。

始めは、教師になるための自信と覚悟を身に付けるどころか、大変さに圧倒され希望の職業を変えようと思った。しかし時間が経ち仕事にも慣れ生徒との距離も縮まると、生徒が楽しそうに授業を受け内容を理解してくれることにとってもやりがいを感じた。もっと日本語を好きになってもらえるようにと努力することができた。どの仕事も簡単ではなく、誰もが日々勉強してキャリアを築いていることが良く分かった留学だった。この留学を通し覚悟が身についたかどうかは正直まだわからないが、沢山の生徒が日本語に興味・関心を持ってくれたことで自信は付いた。大学に戻り教師になるための必要な勉強をきちんとし、四年生になった時覚悟が身に付いたと実感できるようにしたい。

外国語能力に関して、帰国後の 2018 年 1 月 28 日（日）に TOEIC を受験した。結果は、990 点中 740 点であった。リスニングは 495 点中 435 点、リーディングは 495 点中 305 点であった。

リスニングでは試験中、集中力を切らすことなく会話を聞き取ることが出来たが、リーディングでは時間が足りず最後 10 問ほど解くことができなかった。

留学中、スピーキング力とリスニング力向上を重視し、ホームステイの家族と食後必ず英会話の練習をする時間を設けたり、英語の字幕なしに洋画を見たりする機会が多かった。そのため聞いた英語を日本語に翻訳する必要なしに聞く能力を身に付けることが出来た。しかし、洋書や英字新聞など英語の文章を読むことが少なく、英語の文章を速読する力はあまり身につけていなかった。これからは、大学の図書館などで英字新聞や洋書を借り時間を計って文章を読み切る、過去問を多く解き出題傾向に慣れることを徹底し全ての問題を時間内で解けるように努力したい。

6. 留学後に行う鹿児島地域を活性化する活動について述べてください。(500 字程度)

帰国後は鹿児島県内の教員の方及び教員を目指す大学生にオーストラリアの外国語教育法を伝え、英語教育の発展に努めたい。公民館などで部屋を借り、それぞれが学んだことをプレゼンテーション形式で発表しその後質問に答える。プレゼンテーションを行う際は、オーストラリアの授業で使われていた教材と似たものを用意し、可能であれば授業風景を撮影した映像を流す。来ていただいた方に出来るだけ身近に感じてもらえるような発表を心掛けたい。またポスターを作

り学校ごとに違う授業法を一目で分かるようにするのもよいと思う。発表後は教員と学生が混ざって小さなグループを作り、発表を踏まえた上でこれからの日本の英語早期教育について話し合う。教員側からは現状の小中学校の様子・大学生側からは将来目指していきたい英語教育の方向性・私たちからは、盛んに外国語教育が行われている場所で実際に授業を体験したからこそ分かる今の日本の教育に必要なことなど、それぞれ異なる視点から意見を言い合うことが出来る。長時間教員と大学生が一つの議題について真剣に話し合う機会も滅多にないと思うので、双方にとって改めて教育について考え発展させる良い時間になると考える。

7. 留学を今後の自分の生き方にどのように活かすか、留学成果を活用して将来鹿児島地域に貢献できることは何か記述して下さい。(500字程度)

留学成果を活用して将来鹿児島地域に貢献できることは、自分が教員になり教育を実践することだと思う。私は普通の学生より約1年間多く実習を積むことができた。授業の見学・経験を重ねることで他の教師志望の人よりも、柔軟で的確な授業をすることができると思う。また、アシスタントとして必要な仕事も分かる。日本にはALT (Assistant Language Teacher) が多くの学校に配属されているが、交流する機会が少なくあまり必要性がなくなっているのではないかと考える。

ALTは数少ないネイティブの人と学べるとてもいい機会だ。自分の経験をもとに、ALTの活動をもっと上手く取り入れられるようにして、英語好きな生徒が一人でも増えるように努力したい。例えば授業中ALTと会話をする時間を増やすことが挙げられる。私が中学生だった時のALTは正しい英単語の発音を教えてくれる先生であり、日常会話をして距離を縮める活動は無かった。授業の初めの10分間、生徒が彼らに身近なテーマを決めて英語で発表し、ALTがまるで日常会話をしているかのような反応をしていくつか質問をする。生徒は聞き取れた範囲で返答をする。発表している側の生徒は自分の英語が通じた喜びを実感でき、聞いている側の生徒は、リスニング力向上に加え、ALTのリアクションを見て日本人とは違う大きな反応に会話の面からも文化の違いを学ぶことが出来る。

この時上手く発表できなかった場合でも、生徒を必ず褒めて前向きにさせる言葉をかけたい。普段日本で生活する上では使わない言語であるため、自分には不必要だと感じ外国語に抵抗を感じる生徒も多い。少しの会話でも通じれば生徒には自信につながる。最終的に「授業外でもALTに声を掛けてみよう。」と考える生徒が増え自分からALTと会話をしに行くようになれば、英語への抵抗も少なくなると考える。

また私はこの実習を通して、小学校の中に英語専門で教える先生がいてもいいのではないかとこの考えが出来た。

私の赴任先の先生はクラスを持っておらず、一人で幼稚園生から小学校六年生まで週に一日ずつ教えている。日本語を教えている時間は担任の先生は休息を取ったりテストの採点をしたり他のことに時間を充てられる。又担任ではない教師がクラスの生徒を見ることで、生徒たちの状態・様子の変化に気付く割合が増える。

日本では担任が英語を教えることで負担も増大しているの、このような考え方を鹿児島県内にも広めていきたい。

平成 30 年 2 月 6 日

鹿大「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業（長期派遣留学）
留学後地域活性化報告書

鹿児島大学長 殿

鹿大「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業（長期派遣留学）実施要項に基づき、下記のとおり報告します。

記

1. 報告者情報

所属/学年	法文学部人文学科 2 年	性別	女
卒業/修了 予定年月日	平成 32(2020)年 3 月 31 日		

5. 留学後の鹿児島地域を活性化する活動の概要を、留学の成果との関係がわかるように記述してください。（700 字程度）

【活動のタイトル】 ネイティブスピーカー（日本語を母語とする人）の教師と ALT が教える日本語

【活動の期間】 2018 年 2 月 4 日（日）

【活動の概要】

帰国後、鹿児島県内の教員の方及び教員を目指す大学生にオーストラリアの外国語教育法を伝え、英語教育の発展に努めることを目標として大学内で 2018 年 2 月 4 日（日）、10 時からと 14 時からの 2 回に分けて報告会を行った。事前に鹿児島市内の小学校教諭や鹿児島大学の教授、鹿児島大学在校生等に連絡を行った。参加者は教員 9 名、学生 9 名であった。内容は、自分が学んだことを発表するプレゼンテーション、質疑応答、意見交換であった。私の他に同じプログラムで留学をした 4 人の鹿児島大学生と共に報告会を行った。それぞれの小学校・中学校で同じ日本語を教えているが、教師によって授業法は異なっていたため、自分たちが赴任した学校ごとの特徴を上げ、そこから共通して持つ ALT の役割をまとめとした。

私は 5 人の中で唯一の日本人が担当教師として日本語を教えている小学校に赴任したこともあり、ネイティブスピーカー（日本語を母語とする人）の教師と ALT が教えることで児童たちにどのような影響を与えるのかをテーマに発表した。私が赴任したケーリーン小学校の日本語教師である北坂真理さんは、2 年前にこの学校の教員となった。北坂さんは授業中に必要な全ての指示を日本語で行うことを徹底しており、児童は北坂さんの日本語の指示のみで、立つ、座る、並ぶ、プリントを配るなどの行動をすることが出来る。始めは理解されなくても根気よく言葉を使い続けることで、児童には日本語がとても身近な言語になっていき、休み時間でも自分が覚えた言葉を使おうと私に話しかけて来てくれる。授業内だけで学ぶ教科書に載っているような言葉ではなく、日常に取り入れることができる言葉を多く教えることで、より興味関心を沸かせていた。また、日本人が 2 人いることで地域ごとに異なる日本の文化を紹介することができたり、内

容を充実させた会話練習をすることができたり、児童にとっても日本をより詳しく学ぶことが出来る良い機会に繋がっていた。やはり、ネイティブスピーカーの存在は言語、文化、慣習を学ぶ全ての場面で一段階上の指導が出来ると実感した。

また、それぞれの学校が考える日本語教育の理念は異なるため、ALTは学校の方針に応じた働き方をする必要がある。教師とALTが授業方針について話し合う時間を頻繁に設け、受験英語だけではなく、生きる英語習得のために必要な学びの時間を増やしていくことが重要である。

6. 鹿児島地域を活性化する活動の成果と今後の課題と展望について述べてください。(700字程度)

活動の成果として、日本の教員の方と共有したいことは、アクティビティ時間の重要さである。私たちが赴任した先の学校では、毎時間アクティビティ（ビンゴゲーム、かるたなど）を取り入れて生徒たちが楽しく日本の言葉や文化を学んでいた。例えば日本語で数字を数える練習をする際、3（さん）の場合は太陽（sun）を指さすなど身体を使って覚えさせていた。日本のお金を実際に使い、スーパーやレストランに見立てた場所で接客の練習をすることもあった。頭と身体両方を活用することで、ただ言葉を学ぶ時よりも格段に、得た言葉を自分のものにしようとする態度を見て感じる事が出来た。机に向かって英単語を覚えたり長い文章を読んだりする日本のやり方とは違い、文化と言葉を楽しみながら学ぶキャンベラのやり方を紹介することで、小学校外国語指導導入に悩む先生方に少しでも力になることができたと思う。

また、私は日本の小学校に第二言語のみを教える教師を取り入れるべきではないか？と考える。外国の文化・歴史を知った専任の教師が外国語を教えるやり方だ。この方法を取り入れることで、担任教師の授業負担を減らし、また第二外国語の授業をしている間担任は他の事務作業を行うことが出来る。今回留学に行った私たちなどが、小学校の第二外国語専門教師となることで、児童たちも楽しみながら学び外国に興味を抱くことができる。外国に興味を抱くということは、やがて彼らが大人になった時、世界に羽ばたく人材になる礎となるのではないかと思う。このようなアイデアを実現することは困難であると思うが、自分が教員になった後のメリットも多いので、機会を捉えて提言を続けていきたい。